

---

---

## 欧米人の学んだ中国語

— ロバート・トームの『意拾喩言』を中心に

内田 慶市

(関西大学)

---

---

### はじめに

欧米人の中国語研究について、石田（1942）は次のように述べている。

西洋人が支那に就いての知識を持つたのは随分古い時からであるが、その研究を始めたのはさして古いことではない。多少とも「研究」といふ名に値する業績の出始めたのは十六世紀の終から十七世紀の初の頃、明末・清初に於けるカトリック宣教師の支那布教以後のことであつて、彼等がその本務遂行の必要上支那文物の調査攻究に従つたのを以て略々その嚆矢として差支ないであらう。

(石田幹之助『欧米に於ける支那研究』創元社、1942、序言)

すなわち欧米人の中国語への関心、そして中国語研究はこのような宣教師をその主要な担い手としたいわゆる明末以降の「西学東漸」という大きな潮流の中のひとつの具体的な事象と考えられる。ところで、彼らは中国にキリスト教とヨーロッパの近代科学文明をもたらしたが、実はその中に「イソップ」も含

まれていた。彼らは「バイブル」と「イソップ」を携えて中国にやって来たのである。たとえば、戈 (1984) は H. Bernard の *Le Père Matthieu Ricci et la société de son temps* (利瑪竇神父傳) (1937) を援用して次のように述べている。

当時のイエズス会士たちは東方に布教にやってくるときには、みな「イソップ寓話」を携えており、しばしばその中の寓話を引用して、モラルを説いたのである。裴化行 (Bernard, R. P. Henri—筆者) の『利瑪竇傳』には「ある一人の役人がイエスの事跡を述べた小冊子に見入っているのを見て、私は、これは我々の教えに使うものだから差し上げられないと言い、代わりに一冊のイソップを贈った」とある。(p. 230)

このことは、遅れてやって来たプロテスタント宣教師においても同じことがいえるようである。たとえば、*Chinese Repository* (Vol. VII No. 8. Dec. 1838) には次のような記述が見られる。

Another kind of publication, very acceptable to the Chinese, is the short tale, covering a moral lesson, or reflection, such as the excellent fables of Aesop. (中国人に受容されうるその他の出版物は、教訓や思想を含んだ、たとえばイソップの優れた寓話のような短い物語である)

イソップの中国語訳は現在までこれもリッチの『崎人十篇』(1608) に採られた数編が最初のもので認められる。その後、パントーハ (龐迪我, P. Diego, de Pantoja) の『七克』(1614) にもイソップが採られ、明代のまとまったものとしてはトリゴー (金尼閣) の『況義』(天啓五年: 1625) が知られて<sup>1)</sup>いる。このうち、とくにトリゴーとパントーハの間には明らかな影響関係が見てとれる。以下に示すように、トリゴーは明らかにパントーハの訳を踏襲していると思われる。

---

1) 『況義』についてはこれまで写本 (パリ国立図書館に3種、またオックスフォード大学に1種) の存在しか確認できず、刊本として出版されたかは不明である。

(1) 一賢寓言曰、獅子為百獸王、一日病、百獸來問安、獨狐未至、狼遂獻諛曰。大王病、我輩皆至、狐獨否、誠可恨。狐狸適至、聞後言、便進問疾。獅子大怒、問後至者何。狐狸曰。大王疾、百獸徒來一問安。于大王疾何瘳。小狐則遍走求良方。頃得之、即來、何敢後。獅子大喜、問用何藥。曰。當用生剝狼皮、乘熱蓋大王體、立愈耳。獅子便搏狼、如法用之。詩曰。豈不爾受、既其女遷。(卷六平如篇)

獅子為百獸王。一日病。百獸來候安。獨狐未至。狼遂獻諛曰。我輩皆來。狐獨否。誠欺王。狐適至聞之。便進問。獅子大怒。詰後至者何。狐曰。大王疾。百獸徒來一候安。於大王疾曷瘳。小狐則遍走。求良方。頃幸得。趨前。何敢後。獅子更大喜。詢何藥也。曰。當用生剝狼皮。乘熱被大王體。立愈矣。獅子便搏狼、如法用之。義曰。諛人之言。甫脫于口。剝膚之慘。旋羅躬。可畏哉。(況義8)

(2) 寓言曰、烏栖樹啄肉。狐巧獸也、欲得其肉、詭諛烏曰、人言黑如烏、乃濯濯如雪、殆可為百鳥王乎、特未聞和鳴聲耳。烏大喜、啞然而鳴、肉則墜矣。狐得肉、視烏而笑、笑其黑、且笑其愚也。彼面譽爾者、若以爾為智、必知爾不喜譽、而弗敢為譽。惟有求於爾不得、且意爾為愚可欺、乃面譽以增爾愚、而得所欲得焉。一已得、且譏爾傲、笑爾愚也。爾奈何傾耳以聽虛譽而取笑譏乎。塞榻加曰、離人於正、莫如喜聽譽也(卷一伏傲篇)

烏棲枝啄肉。狐欲奪肉。詭諛烏曰。人言黑如烏。乃濯濯如雪。是堪為百鳥王。但未聞聲何如。烏大喜。啞然而鳴。肉下墜。狐遂得肉。義曰。人面諛己。必有以也。匪受其諛。實受其愚。(況義9)

(3) 爾遇難時、惟視有樂勝爾者、故難忍。若視有苦勝爾者、易忍矣。昔有賢人寓言曰、獸中兔膽最小。一日衆兔議曰、我等作獸特苦。人搏我、犬狼我噬我、即鷹鷂亦得攫我、無時可安。與其生而多懼、不如死、死而懼止矣。向前有湖、固相約往自溺水。水旁有蛙、見兔、驚亂入水。前兔見之、止衆兔曰、且勿死、尚有怖過我者。(卷四熄忿篇)

獸中兔膽最小。一日衆兔議曰。我等作獸特苦。人搏我、犬狼噬我。

即鷓鴣亦得攫我。無時可安。與其生而多懼。不若死。死而懼止矣。相向往湖中。將溺死。湖岸有蛙。見兔。駭亂入水。前兔遽柅。衆兔曰。止。止。尚有怖過我者。義曰。有生者。夫各有所制矣。毋自惑也。雖然。不憂不懼。豈為能制人。(況義 22)

またトリゴー以降にも、たとえばアレーニ(艾儒略)の『五十言餘』(1645)でもイソップの寓話が見えるが、中国語訳イソップの流れの中で、その中国語の質、量、普及の度合い(中国国内はもちろんのこと日本をも含む<sup>2)</sup>)、また中国語学研究史上における価値等々どれをとってみても他を圧倒しているのがロバート・トームの『意拾喻言』(1840)である。

今回はとくにそこに見られる文体や「官話」の性格を中心に取り上げ、そこからさらに「欧米人の学んだ(考えた)中国語」というものについて考えてみることにしたい。

## 1. 『意拾喻言』

『意拾喻言』は、1840年にThe Canton Press Officeから出版されたもので、その扉には「意拾喻言 ESOP'S FABLE WRITTEN IN CHINESE BY THE LEARNED MUN MOOY SEEN-SHANG, AND COMPILED IN THEIR PRESENT FORM (With a free and a literal translation) BY HIS PUPIL, SLOTH.」(「博学なる蒙昧先生によって中国語に訳され、そのものぐさな生徒によっ

---

2) 中国ではその後、『伊娑菩喻言』として香港、上海で復刻され、清末には『海國妙喻』(1888)として中国人張赤山の手によって改訂本が出版された。ただ、張訳では話の場면을トームとは逆にできるだけ「中国化」を排除しようとしているところが特徴である。なお、民国に入り商務印書館から出版された『伊索寓言演義』や『伊索寓言』(いずれも孫毓修編)もこの『意拾喻言』をもとにしている。また日本にも同じく『伊娑菩喻言』系統本が舶載され、『漢譯伊蘇普譚』(阿部弘国訓点、大槻磐溪序、1876)、『漢譯批評伊蘇普物語——一名伊娑菩喻言』(前田林外編纂、小野築山訓点、1898)として出版されている。『意拾喻言』から『伊娑菩喻言』への変遷等については別に論考が用意されている。

て意訳と直訳付きの現在の形に編集された意拾喩言) とある。

四つ折り判の大きさと、献辞 (1 頁)、Errata (1 頁)、英文の Preface (3 頁)、英文の Introduction (19 頁)、Remarks (6 頁)、英文の目次 (2 頁) の後に、「叙」、「意拾喩言小引」が 3 頁、さらに References and Explanation (1 頁)、そして本文が 104 頁というのが全体の構成である。

いま「MUN MOOY SEEN-SHANG (蒙昧先生)」はさておき、「HIS PUPIL SLOTH (そのものぐさな生徒)」という特異な呼び名で自称する編者は、その後死の 2 年前に初代英国寧波領事となり、39 歳で夭折した英国人口バート・トーム (Robert Thom, 1807 年 8 月 10 日 1846 年 9 月 14 日) <sup>3)</sup> である。

## 2. トームの中国語学研究

彼の中国語に関する知識は相当なものであり、貿易商や外交官であると同時に

3) トームの「意拾喩言」以外の著作には以下のようなものがある。

(1) 「王嬌鸞百年長恨」*Wang Keaou Lwan Pih Neen Chang Han or The lasting resentment of Miss Keaou Lwan Wang, a Chinese tale : founded on fact* (The Canton Press Office, 1839)

これも「Sloth」のペンネームで出版された。「今古奇観」や「清史」などにも収められている有名な白話短編小説の英訳であり、豊富な注もつけられている(本文 66 頁、挿絵 1 枚)。その序には「Canton 25 th December 1838」とある。なお、本書はその後 1846 年に Adolf Bottger によってドイツ語にも翻訳されている。

(2) 「華英通用雑話」上巻 *Chinese and English Vocabulary, Part I* (1843?)

同じく広東で出版された英漢対訳語彙集(会話付き)である。正確な出版年は不明であるが、巻末に著者の英文の識語があり、そこに「Canton 10th August 1843」とある。

(3) *The Chinese Speaker, Part I* 「正音撮要」上巻(寧波華花聖經書房、1846)

その中国語タイトルからもわかるように「正音撮要」(高静亭 1810)の会話部分、「紅樓夢」の第 6 回、さらに「家寶全集」の「知夫順妻」に音注と英訳を施したものである。本書は中国印刷史研究の面からも実は貴重な資料である。おそらく本書が中国で正式に「分合活字」が使われた最初のものである。

このほか、Bridgman, *Chinese chrestomathy in the Canton dialect* (Macao, 1841) の貿易用語に関する第 5 章、第 6 章もトームの手にかかるものである。なお、トームの詳しい経歴については拙稿 1999 b を参照。

に、一方では当時、有数の中国語学者であったといえる。『意拾驗言』の Introduction は文字学、文体論、文法学を簡潔に述べた中国語概論とでもいうべきものである。とくに、そこでの「官話」の分類などはまさに注目に値する内容である。それはある面では、それ以前のマーシュマン (Marshman) やモリソンをも凌いでいると思われる。また彼の研究はその後の中国語学にも大きな影響を与えている。まず、彼の「中国語（その文体）の分類」について述べておく。

トームは、中国語をまず「文字」(Written Language) と、「言語」(Spoken Chinese) の二つに大別する。つまり「書面語(文言)」と「口語」の区別である。

「書面語(文言)」つまり「文字」はまた「寫法」あるいは「手寫」とも表されるが、それはさらに次のように分類される。

## I. 古文 (ancient literature)

### (1) 經書、(2) 古詩

## II. 時文あるいは世文 (modern literature)

- (1) 文章 (fine writing) ……最も優れた「文章」は漢代のもの。また、「文章」は「世文之首 (the very head of modern Literature)」と呼ばれる。
- (2) 詩賦 (Poetry, Songs, Ballads &c, &c. not ancient) ……最も良い詩は唐代のもの。
- (3) 論契 (Edicts from the Emperors or the Mandarins to the People)
- (4) 書札 (embracing all the different styled of correspondence)
- (5) 傳志 (all History, and Historical Novels of the first order) ……『三國志』や『列國傳』の類。
- (6) 雜録 (which in opposition to the wan chang (called as stated above the very head of Modern Literature) is styled 時文之末 or the dregs-being the easiest and humblest style of composition. Under this head are included all silly novels and trash of stories, -and we must add, that, the humble work

now laid before the public-claims no higher classification than as belonging to the dregs of Chinese Literature!) ……  
 「意拾喻言」はまさにこの「雜録」に入ることになる。つまり、「時文之末」であって、「文章」の対極にあるもの。文の最も簡単に粗野なスタイルである。

「口語」すなわち「言語 (Spoken Chinese)」はまた「説法」とか「口説」とも呼ばれるが、大きく「官話 (Mandarin Language)」と「郷談 (local dialect)」に分けられる。

「官話」はさらに二つに分けられる。

- (1)「北官話」……また「京話」あるいは「京腔」とも呼ばれる。簡単にいえば、北京の言葉である。以前都が南京にあった時は今の広東語のように非常に低俗な地方訛りであると考えられていたが、今では国内いたる所で通用する。
- (2)「南官話」……また「正音 (true pronunciation)」あるいは「通行的話 (language of universal circulation)」とも呼ばれる。これが正式な「官話」であり、また南京で話される言葉である。北京の人々は正音を自分たちの言葉に取り入れているが、たとえば入声などを正しく発音できない。

また、「北官話」の言葉を反映したのとして『紅樓夢』『金瓶梅』『正音撮要』『聖諭』をあげ、「南官話」の特徴として「入声」があり、いわゆる多くの「小説」はこの「南官話」で書かれていると指摘している。

「郷談」については、種類が多すぎてすべてを説明するのは不可能とし、康熙字典の「郷談豈但分南北、每郡相隣便不同 (郷談は単に南北で異なるだけでなく、隣り合わせの村ですらも同じではない)」という一節を引用して、その複雑さを述べている。ただ、広東語と福建語については少し詳しい説明を加えている。

トームのこのような分類に対して、たとえばモリソンも「官話」には言及するがこれほど詳しくはない。モリソン 1815 では次のように述べられているだけである。

What is called the Mandarin Dialect, or 官話 Kwan hwa, is spoken generally in 江南 Keang-nan, and 河南 Ho-nan, Provinces, in both of which, the Court once resided; hence the Dialects of those places gained the ascendancy over the other Provincial Dialects, on the common principle of the Court Dialect becoming, among People of education, the standard Dialect. A tartar-Chinese Dialect is now gradually gaining ground, and if the Dynasty continues long, will finally prevail. There is no occasion to suppose it a "Royal Dialect, fabricated on purpose to distinguish it from the vulgar." Difference of Dialects arise gradually without art or contrivance!

*Dictionary of the Chinese language, in three parts Vol. 1, Part I, X*

またトームの後の、たとえばウィリアムズは *A syllabic dictionary of the Chinese language* 『漢英韻府』(1874) で次のように述べるが、明らかにトームを踏襲していると思われる。

In this wide area, the Nanking, called 南官話 and 正音 or true pronunciation, is probably the most used, and described as 通行的話, or the speech everywhere understood. The Peking, however, also kown as 北官話 or 京話 is now most fashionable and courtly,……

ところで、このような分類はトームによれば、「我々の師である蒙昧先生による分類」ということであるが、これより先にトームが「不完全である」と批判する M. de Guignes (1759-1845) に依るという分類もトームが言うほどには劣っていない。この Guignes の分類は、<sup>4)</sup> プレマール (Prémare) やフルモン (Fourmont) の流れの中にあると考えられる。すなわち、この Introduction の前段は、トーム以前の中国語分類の総まとめと見ることもできる。そこで述べられている、「古文」「文章」「官話」「郷談」の分類のうち、とりわけ「文章」と「官話」に関する記述は見るべきものがある。



たとえば、「文章」と「官話」について次のように説明される。

「文章」は「古文」ほど簡潔ではなく、「より飾られた」もの。この場合「死」「活」「虚」「實」という文字の精妙な区別が必要である。しばしば「時間」や「数」を表す「particle」<sup>3)</sup>が用いられる。「文章」はあくまでも「書かれるもの」で、「会話」には用いない。

これに対して「官話」は、「文章」よりも冗長であり、繰り返しが多く、話す人間の個性、迫力、明快さを帯びる。「同義語」「前置詞」「副詞」あるいは「particle」が多く用いられる。このことで「官話」は意味が明確、具体的になる。しかし、「官話」は「書面語」ではほとんど用いられず、「会話」にのみ用いられる。したがって、中国語における「口語」には二つの方法しかない。「官話」か「郷談」である。「官話」は北京、広東、ある

- 4) M. de Guignes, *Voyages à Peking, Manille et L'île de France, faits dans l'intervalle des années 1781 à 1801* (1808) の pp. 391-395 の記述による。なお、Guignes については、石田幹之助によれば以下のようにある。

ド・ギーニュに一子あり、その名をクリスチアン・ルイ・ジョセフと云ひ、世に小ド・ギーニュと稱せされる。(1759 生 1845 死)。父に就いて支那語を學び、廣東に於いて佛蘭西の領事たること十七年、歸國の後ナポレオン一世の命を奉じて漢佛拉對譯字書の編纂に従事し、1813 年に至ってその出版を見たがそれは實は永く未刊のままに埋れてみた伊太利人バシリオ・デ・ヂェモーナの著「漢字西譯」(Dictionarium Sinico-Latinum) を基礎とし、單にその拉丁譯語を佛譯にして之に添へ、漢・佛・拉の三者を並べ存せしに止りて何等新意を加へた所なく、一種の剽竊として後に大いに學界の非難を受けた。

……因に云ふ、バシリオ・デ・ヂェモーナは伊太利ヂェモーナの人、フランシスコ派の宣教師で十七世紀後半、康熙帝時代に支那に布教した人で、その著に係る字典は複本がいくつか出来、今日東西の大圖書館にして之を藏するものは二三に止らない(彼の名を普通デ・グレモーナと稱するのは全くの訛傳であつて、デ・ヂェモーナが正しい)。なお、小ドギーニュには「北京紀行」*Voyage à Peking, Manille, et l'île de France* (Paris 1828. 3 vols. et Atlas) 等の著があり、歸國後は外務省出仕となつてみた。(『歐人の支那研究』日本圖書株式會社、1946、229 頁)

- 5) この「particle」というのは、トームによれば、「之、乎、者、也、矣、焉、哉、七字能分者秀才也」で代表的に示されるいわゆる「虚字」の類である。また「複数」を表す「輩(吉輩)」や「曹(爾曹)」「等(伊等)」などもこの類に入れられる。

いは他の都市でも通用するが、とくに江南地方の人がそれをうまく話す。

これは中国語の文体の特徴をかなりの程度まで言い当てているように思われる。いずれにせよ、このような優れた中国語の文体論を背景にして漢訳イソップ『意拾喩言』は生まれたといえる。

### 3. 『意拾喩言』の言語的特徴——「文言白話混淆体」

本書が作られた目的は、英文 Preface や中国語の「叙」によれば、当時「欧米人が中国語を学ぶため」の適当な入門書がなかった（蓋吾大英及諸外國、欲習漢文者、苦於不得其門而入）ことによる。つまり、あくまでも、欧米人の中国語学習用テキストということであって、これまでの宣教師の立場とは少し違っているが、このスタイル（トームはこのスタイルを Simple Style と呼んだ）を習得することによって学習者はさまざまな「小説」を全く困難なしに理解でき、より高度な文学への踏み台としても役立つと考えたのである。

では『意拾喩言』の言語的特徴、とりわけその文体とは具体的にはいかなるものであるのか。

結論から先にいえば、このトームの採用した文体は、基本的には「文言」であるが、「白話」に限りなく近い「文言」、すなわち「文言白話混淆体」である。この「文言白話混淆体」についてはこれまでもよく言われてきており、直感的には Varo (1703) の言う「第2モード」<sup>6)</sup>、あるいは、後の漢訳聖書でいわれる3種の文体（「文理」「浅文理」「官話（国語）」）のうちの「浅文理」、さらにはトームの影響を受けたと思われる Meadows の「familiar style」<sup>7)</sup>、さらには Mateer の言

6) Francisco Varo はスペインのドミニコ会の宣教師であるが、*Arte de la lengua mandarina* 『官話文典』(1703) において「官話」の文体に三つのモード（口頭語としての文語、文語・口語の混交体、普通の口語）があることを述べている。これについては古屋昭弘「17世紀ドミニコ会士ヴァロと『官話文典』」(『中国文学研究』22、1996)、「明代知識人の言語生活——万暦年間を中心に——」(『現代中国語学への視座 新シノロジー・言語編』東方書店、1998) に詳しい。

う「Book Mandarin」にはほぼ相当するものと考えてよいと思われるが、そのような文体の定量化あるいは具体的な鑑定語について言及したものはあまりない。ロシアのヤホントフ 1969 はその意味で注目すべき論考である。

ヤホントフは唐宋時代の文献についてその文体（文言、白話、混淆体）を識別する鑑定語として以下の 25 語をあげて、古文、傳奇、変文、語録、話本の文体的特徴の定量化に成功してしている。

文言虚字（つまり上古漢語の要素）

A類

其、之（代）、以（介）、於、也、者、所、矣、則

B類

而、之（定）、何、無、此、乃

白話虚字（つまり近代漢語の要素）…C類

便、得（V 得）、個（量）、了、裡（方）、這、底（定）、着（V 着）、只（副詞）、子、兒

変文と語録が「混淆体」であり、文言虚字の鑑定語のうち、此、何、之（定語）、而、無、乃の 6 語（B類）がとくに変文において他の文言虚字に比べて多用されるのは、変文類が、意図的に「文言化」しようとした結果であるともいう。

7) Thomas Taylor Meadows は *Desultory notes on the government and people of China and the Chinese Language* (Wm. H. Allen and Co., 1847) の中で、M. Rémusat, *Grammaire Chinoise* における中国語の 3 種の文体 (Antique, Litteraire, Mandarinique) を補正する形で以下の 5 種類に分類した。

1. Ancient style, 2. Literary style, 3. Business style, 4. Familiar style, 5. Colloquial Chinese.

このうち、3 と 4 がいわゆる「混淆体」に相当し、3 の典型としては「大清会典」を挙げ、4 は business style と colloquial (つまり口語) の中間であり、書き言葉としては最も平易なもので、軽い読み物や演劇類がそれに入るとした。

8) C. W. Mateer, *A course of Mandarin lessons, based on idiom* 『官話類篇』(1892 初版) では官話は 1. T'ung-hsing Mandarin, 2. Local Mandarin, 3. Colloquial Mandarin, 4. Book Mandarin の四つに分類される (Introduction, XIV)。

このヤホントフの鑑定語は唐宋の文献資料の識別を目的としたものであるが、明代さらには清代の文体、とりわけ、「文言白話混淆体」というものを考える場合には充分有効なように思われる。

『意拾喻言』でのこれらの鑑定語の使用数を掲げてみる。

## A類

其	之	以	於	也	者	所	矣	則
185	172	19	82	126	87	48	62	68

(A類計849)

## B類

而	之	何	無	此	乃
116	155	5	89	68	36

(B類計469)

## C類

便	得	個	了	裡	這	底	着	只	兒	子
2	12	0	5	2	5	0	1	5	1	6

(C類計39)

この結果によれば、『意拾喻言』は、ヤホントフの統計における「変文」と「語録」の中間に位置しているように見える。

ただヤホントフの鑑定語以外にもたとえば以下のような「白話的要素」が考えられる(括弧内の数字は『意拾喻言』の寓話の番号)。

## &lt;副詞&gt;

正在(31、73)、必得(74)、休得(60、81)、幸得(43)、只得(54、59、80)、幾乎(5)、將近(44)、將就(67)

## &lt;代詞&gt;

你(16、29、42、44、45、48、54、55)、他(26、35、82)、那(63、82)、甚麼(82)

介詞

往 (68, 90)、從 (68)、將 (8, 54, 55, 63, 67, 75)、向 (7, 33, 38, 63)、在

このほか、差得遠 (21) といった慣用的な「様態補語」の使用、攫去 (8)、伐去 (60)、咬去 (66)、走出 (67) のような「方向補語」や纏住 (38) のような「結果補語」が多用されていることも白話的といえよう。還了得 (66)、出差 (63)、方便 (67)、下種子 (22)、放心 (51)、衆小官 (20)、高興 (39)、得罪 (1)、玩意 (45)、玩耍 (21)、摸弄 (45) なども白話的な語彙といえそうである。

『意拾喻言』の序文には、本書がトームによる官話による口述、ネイティブの教師 (すなわち蒙昧先生) による筆記という形で成立したことも述べられている。

この方法は明代の宣教師の場合も、また清末の江南製造局での翻訳事業の際にも採られたものであるが、ここで注意しておくべきことは、出来上がったものは「官話」すなわち「口語」を反映するがあくまでも「書面語」ということである。トームによればこの方法は、英語で口述し、書き写す人(多くは聖職者)は同じ内容をラテン語で筆記するというヨーロッパに数世紀前にあった方法であるという。おそらくここにはヨーロッパで書き言葉として広く通用したラテン語というものに対する一種の「信仰」めいたものが背景にあると考えられる。以下に示すように、リッチ以来、ヨーロッパ人はすでに「官話」の存在を認識していたが、彼らは中国語の「書面語」と「官話」を考えると、つねにラテン語とヨーロッパの各言語との関係の中でとらえようとしていたように思われる。すなわち「書面語の優位性」である。

たとえばセメード<sup>10)</sup>は次のように述べている。

9) トリゴアの『祝義』も同様で「西方金尼閣口授、南國張廣筆傳」となっている。

10) アルヴァーロ・セメード『チナ帝国志』(1642) 矢沢利彦訳 (『リッチ、セメード 中国キリスト教布教史二』大航海時代叢書第II期9、岩波書店、1983 第1次発行所収)

チナで使用されている言語は大変古いもので、多くのひとびとはそれがバベルの塔の72言語のひとつであると信じているほどである。……今日この帝国にはいくつもの王国があるので、言語もそれに応じて数が多くなっている。……こうしてチナ人の使う言語はクオンホア〔官話〕と称される言葉に統一されていった。それは官吏マングリンの使う言葉のことである。チナ人は自己の統治を他の王国に及ぼすのと歩を一にしてこの言葉をその地方に導入したのである。それは、今日全土にゆきわたっており、全ヨーロッパで通用するラテン語と同様か、いやそれ以上の広がりを見せている。もっとも各王国はつねにその土着の言葉を保存してはいるが。(p. 323)

同じ単語を使っても文体は種々様々である。それだから、一旦筆をとったとなれば、ただちに調子を高める必要がある。日常の話し言葉をそのまま書くなどということは笑いごとであろう。公私に亘る一切のきちんとした発言にせよ、祈願、弁論、説得にせよ、いつもあらかじめ筆で書かれるのはこのことに起因するのである。(p. 325)

リッチも共通語としての「官話」の存在を認識しながら、口語と書面語の関<sup>11)</sup>係について同様のことを述べている。

首先談幾句中國一般的書法、他們使用的字形很像古埃及人的象形文字。在風格和結構上、他們的書面語言與日常談話中所用的語言差別很大、沒有一本書是用口語寫成的。一個作家用接近口語的體裁寫書、將被認為是把他自己和他的書置於普通老百姓的水平。然而、說起來很奇怪、盡管在寫作時所用的文言和日常生活中的白話很不相同、但所用的字詞卻是兩者通用的。因此兩種形式的區別、完全是個風格和結構的問題。所有中國的字詞無一例外都是單音字。我從未遇到過雙音或多音字、雖然有些字可能包含兩個甚至三個元音、其中有些是雙元音。(p. 27)

11) 利瑪竇、金尼閣著 何高濟等譯『利瑪竇中國札記』(中華書局、1983)

人們不可能靠聽寫中文來筆錄一部書、把一本書念給聽衆聽、他們也無法聽懂書的內容、除非人人眼前都有這樣一本書。發音相同的各種不同書寫符號不可能用耳朵聽準、但是可以用眼睛把符號的形狀以及它們的意義分辨清楚。事實上常常發生這樣的事：幾個人在一起談話、即使說得很清楚、很簡潔、彼此也不能全部準確地理解對方的意思。有時候不得不把所說的話重復一次或幾次、或甚至得把它寫出來才行。如果手邊沒有紙筆、他們就沾水把符號寫在甚麼東西上、或者用手指在空中劃、或甚至寫在對方的手上。這樣的情況更經常地發生在有文化的上流階級談話的時候、因為他們說的話更純正、更文縷縷并且更接近於文言。(p. 28)

我認為中國語言含糊不清的性質、乃是因為自古以來他們就一直把絕大的注意力放在書面語的發展上、而不大關心口語。就是現在、他們的辯才也只見之於他們的寫作而不在於口語。(p. 29)

このほか、ゴンサーレス・デ・メンドーサなども同様の認識をもっていた。<sup>12)</sup>

トームの中国語観はこうした当時のヨーロッパ人のいわば伝統的な中国語観の流れにあるように思われる。トームがこの『意拾喩言』をあくまでも「文字之末」である『雑録』の中に分類し、『聖諭廣訓(直解)』や『正音撮要』などとともに口語(官話)の中に入れなかったのはそのためである。

古屋(1998)ではVaroの第2モードや『四書直解』などの「混淆体」について次のように述べる。

あのような文体すなわち文語・口語の混交体が口頭語としても存在しえたことにもはや疑いはない。(p. 132)

12) メンドーサは以下のようにいう。

チナ語はエブレア[ヘブライ]語と同様に、話を聞く場合よりも、文字に書かれた場合のほうが理解しやすい。そのわけはある文字と他の文字は符合によって区別されるけれども、話を聞くにはそれほど容易には区別できないのである。……この国では相異なる多数の言語がおこなわれ、口頭ではたがいに理解できないのであるが、筆記をすれば広く一般に通じるという事実はまさに驚嘆にあたいする。(長南実、矢沢利彦訳『シナ大王国誌』大航海時代叢書VI、岩波書店、1965、193頁)

しかしながら一方ではまた、ヤホントフのいうように「口語と実際に話される言葉を記録するということは別のこと」であり、「そのような言葉を記録した文献は必ずしも口語を正しく反映したものではない」(p. 98)ということも考慮する必要があると思われる。「限りなく話し言葉に近い」が、それは「話し言葉ではない」というのが私の考えである。『聖諭廣訓(直解)』や『正音撮要』あるいは『老乞大』などとはやはり性格を異にすると考えるのが妥当のように思われる。もちろん彼らはそのような「口語」も学んだことは確実であるが、一方では書き言葉としての『意拾喻言』や漢訳聖書のような文体の中国語も学んだのである。Wadeが『語言自述集』のほかに『文件自述集』を編んだのも、Hirthが『文件字句入門』のようなものを書いたのも同じ理由からだと考えられる。

ところで最後に、この「けったいな中国語」を見ると、我々はモリソンの『神天聖書』を思い起こす。モリソンの『神天聖書』(1823)は「漢譯聖書」の文体の分類では通常「文理(high wenli)」に入れられる。しかしながら実際は「文理」よりも平易であると言われる「浅文理」と比べた場合、モリソン訳の方がわかりよい。むしろモリソン訳こそ「浅文理」というべきもののように思われる。このことはマーシュマン訳でも同様である。

そしてこのモリソン訳聖書をヤホントフの鑑定語に当てはめてみると(ただし調査はいまだ途中)白話的要素はほぼすべて充足されるようである。まさに「文言白話混交体」の典型といえるものである。

モリソンの聖書翻訳における基本的な態度とは、何よりも「わかりやすい訳

13) 今、紙幅の関係で具体的な例文は省略するが、たとえば「出エジプト記」の一節だけを見ても、ヤホントフの鑑定語の白話語彙のうち、着、得、個、裡を充足するし、ほかにも白話語彙と考えられる在(介詞)、過、他們、我們、總、走、あるいは結果補語、方向補語が多く用いられている。また、他の章を見ればさらに、的(定)や這、那、了など鑑定語はほぼ充足されている。これらを「浅文理」の典型と考えられる施約瑟の『舊約全書』(1904)の同じ章と比較して見た場合、明らかにモリソン訳が「口語的」である。



文」ということであった。しかしながら一方で彼は「品のある」言葉を求めていた。近代中国における悲劇の翻訳家、嚴復の言葉でいえば「達」であり「雅」である。その結果彼が目指したのは「三國志演義」のような文体<sup>14)</sup>であり、この「文言白話混交体」であったのである。してみると、トームの『意拾驗言』はまさにこのモリソンの(聖書)翻訳における態度の正当な後継者ということもできるのである。白話成分と先秦文の文言の要素が入り交じっているのであるから、実に「けったいな中国語」と言わなければならないだろう。しかし、このような中国語は確かに存在したのである。「これも中国語」であり、おそらくはこの文体こそが「欧米人が学んだ中国語」そのものではないかと考えられるのである。

#### <参照文献>

- 戈寶權 1984 「談利瑪竇著作中翻譯介紹的伊索寓言——明代譯伊索寓言史話之一」『中國比較文學』第1期、浙江文藝出版社、1984. 10.
- 雅洪托夫 1986 『漢語史論集』(唐作藩譯、北京大學出版社、1986)。
- 内田慶市 1994 「イソップ東漸——宣教師の『文化の翻訳』の方法をめぐる」『泊園』第33号、1994.
- 内田慶市 1999 a 「“西學東漸” 與近代日中歐語言文化交流——以伊索寓言的譯介為例」『詞庫建設通訊』第20期、香港中國語文學會、1999. 7.
- 内田慶市 1999 b 「イソップ東漸——ロバート・トームと意拾驗言」『關西大學文學論集』Vol. 49, No. 1, 1999. 10.

14) *Memoirs of the Life and Labours of Robert Morrison, Compiled by his Widow*, Vol. I, Longman, London 1839, pp. 329-331.